北川隆吉先生の思い出

川　上　周　三

2014年５月31日に、柴田弘捷先生からのメールで、北川隆吉先生４月７日御逝去の訃報に接し、茫然自失の思いでした。

2013年の夏には、先生からお電話があり、長いこと今後の日本の大学を巡る状況や日本の社会学のことについて、親しくお話をさせて頂きましたことを思い出しております。その時には、お電話ではありましたが、先生はお元気な御様子でした。

昨年末の御奥様からのお葉書の文面から、先生の御体調が優れないのではないかと拝察し、心配致しておりました。

先生の御生前中にお会いしておけば良かったと、今になって悔やんでおります。

先生には、名古屋大学大学院での文献講読や調査や学会発表等で、厳しいながらも、心に残る御指導をして頂きました。

先生は、社会学の基本文献に通暁させるために、文献講読のゼミでは、青木書店の現代社会学体系シリーズをテキストにし、一人一人の専門分野を考慮して、各自の分担を決め、読破していく方法を取られました。私は、この青木の社会学大系の中から、マックス・ヴェーバーを担当致しました。

その他に、字数を800字程度に制限した文献改題を課題として与えられました。

この課題では、私は、マックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』とカール・マンハイムの『イデオロギーとユートピア』を担当致しました。

先生は、名古屋大学に御赴任された当時、オイル・ショック、ドルショックによる全国地場産業の現状を調査する研究をしておられ、その一環として、岐阜県関市刃物業の調査をされていました。その調査に参加させて頂き、関市刃物業の労働事情に関する調査報告論文を執筆致しました。先生が赴任される以前は、理論分野の論文は書いていましたが、調査論文は書いていなかったので、これが私にとって、初めての調査論文となりました。

鹿児島大学への就職に際しましても、御推薦書を書いて頂くなど、御懇篤なる御配慮を賜りました。

初教鞭を執ることになった大学、鹿児島大学に赴任する際には、講義の前の日は、「面会謝絶で準備をしなさい。」というお言葉を頂きました。

母が他界し、意気消沈していた時にも、「こちらを向いて頑張ってください」と励ましてくださいました。

先生が定年で専修大学を御退職後、私が専修大学に赴任する際にも、公私に渡り、多大なる御尽力を賜りました。

拙著や拙論を書く度、先生にお送り致しますと、的確な御批評と励ましの文書を頂戴したり、お電話で直接親しく御批評や御助言を賜りました。

例えば、拙著、『攻撃衝動の社会学―ニーチェ・ヴェーバー・タイセン―』には、「大切な問題なのだから、もっと丁寧に論じなさい。同学の折原浩先生の指導を受けなさい。君は、この著作で、折原浩・山之内靖のヴェーバー論争の渦中に入ったのです。思想闘争の持つ怖さを忘れてはいけません。」と御電話で、御助言を頂きました。

この折原・山之内論争を踏まえて書いた次の拙著、『資本主義経済システムの光と影―システム論からヴェーバーを解く―』には、「システム論の著作としては薄ぺっらい感じがするが、学兄独自の切り口が見えてきたようなので、これをもっと発展させてゆきなさい。」というお手紙を頂きました。

2008年の在外研究の纏めとして、拙著、『フィラデルフィアの宗教とその社会―日系アメリカ人キリスト

教徒の物語を中心にして―』を執筆し、これをお送りしましたが、それに対して、「ヴェーバーは終わったね。宗教は大事だよ。社会学者はもっと宗教と向かい合うべきだ。この研究をもっと深めていきなさい。」とおっしゃってくださいました。

総じて、先生は弟子の立場に立った弟子思いの先生でした。もう、拙論や拙著を書いても、先生から親しく御教授頂けないかと思うと、返す返すも残念でなりません。寂しさがこみ上げて参ります。先生には、折原浩先生等、社会学の諸先生の御紹介もして頂きました。先生からの学恩に報いるため、今後とも、教育研究に精進をしていきたいと思っております。

先生の御指導御鞭撻の一環を振り返り、先生の思い出の一文を擱筆させて頂きます。